

氏 名	鈴木 敦子
学 位 の 種 類	博士（看護学）
学 位 記 番 号	第41号
学 位 授 与 年 月 日	令和4年3月19日
学 位 授 与 の 条 件	学位規程第3条第4項該当
学 位 論 文	乳がん化学療法を受ける患者の就労継続にかかわるセルフケア能力 を把握する質問紙の開発と質問紙の活用ガイドの作成
論 文 審 査 委 員	主査 大熊 恵子 副査 高橋 和子、武田 和久

論文の要旨

【目的】

本研究の目的は、乳がん化学療法を受ける患者の就労継続を支援する看護師が活用できる、就労継続にかかわるセルフケア能力を把握するための質問紙を開発し、質問紙を適切に活用するための活用ガイドを作成することである。

【方法】

本研究は、研究課題1及び課題2の二段階で実施した。研究課題1では、乳がん化学療法を受ける患者の就労継続にかかわるセルフケア能力の構成概念を明らかにするため、乳がん化学療法期間中に就労を継続していた者を対象に半構造化面接を行い、質的帰納的に分析を行った。研究課題2では、研究課題1の結果を踏まえ、「乳がん化学療法を受ける患者の就労継続にかかわるセルフケア能力を把握する質問紙原案(以下、質問紙原案)」の作成を行い、構成概念妥当性、基準関連妥当性、信頼性の検証のため、乳がん化学療法期間中に就労を継続していた者を対象に、無記名自記式質問紙調査を行った。基準関連妥当性の検証には、慢性病者のセルフケア能力を査定する質問紙29項目版(以下、SCAQ-29項目版)を用いた。研究課題1及び2は、宮城大学研究倫理専門委員会の承認（研究課題1承認番号：平成28年度宮城大第978号、研究課題2承認番号：令和2年度宮城大第419号）を得て実施した。

【結果】

研究課題1では、対象者12名の面接データから、就労継続にかかわるセルフケア能力として、443コード、50 サブカテゴリー、17 カテゴリー、6 コアカテゴリーが抽出された。

研究課題2では、研究課題1の結果で抽出された50のサブカテゴリーに基づき、50の質問項目から成る質問紙原案を作成した。質問紙調査の結果、回答者数は201名（回収率88.5%）、有効回答者数は172名であった（有効回答率85.6%）。項目分析、探索的因子分析により、質問項目は、「自分なりの働き方を見出す力」、「体調に応じて日常生活を整える力」、「能動的に仕事を調整する力」、「化学療法による副作用症状が及ぼす影響を予測する力」の4因子27項目に集約された。また、SCAQ-29項目版の合計点と、探索的因子分析で集約された4因子27項目の合計点及び各因子の下位尺度得点において有意な相関が認められ、基準関連妥当性が確認された。Cronbachの α 係数は、4因子27項目で0.865、各因子は0.852～0.743であり、信頼性が確認された。臨床活用に向けた視点から質問紙原案を修正し、「乳がん化学療法を受ける患者の就労継続にかかわるセルフケア能力を把握する質問紙」を開発した。また、看護師が質問紙を活用することにより、就労継続への支援を検討できるよう、「乳がん化学療法を受ける患者の就労継続にかかわるセルフケア能力を把握する質問紙の活用ガイド」を作成した。

【結論】

乳がん化学療法を受ける患者の就労継続を支援する看護師が、開発した質問紙を用いて、就労継続にかかわるセルフケア能力を把握することにより、個々のニーズに沿った就労継続への支援に活用できることが示唆された。

キーワード：乳がん，化学療法，セルフケア能力，就労継続

審査結果の要旨

本学位論文の目的は、乳がん化学療法を受ける患者の就労継続を支援する看護師が活用できる、就労継続にかかわるセルフケア能力を把握するための質問紙を開発し、質問紙を適切に活用するための活用ガイドを作成することである。本研究は、研究課題1及び課題2の二段階で実施した。研究課題1では、乳がん化学療法を受ける患者の就労継続にかかわるセルフケア能力の構成概念を明らかにするため、乳がん化学療法期間中に就労を継続していた者を対象に半構造化面接を行い、質的帰納的に分析を行った。その結果、対象者12名の面接データから、就労継続にかかわるセルフケアの能力として、443コード、50サブカテゴリー、17カテゴリー、6コアカテゴリーが抽出された。研究課題2では、研究課題1の結果を踏まえ、「乳がん化学療法を受ける患者の就労継続にかかわるセルフケア能力を把握する質問紙原案（以下、質問紙原案）」の作成を行い、構成概念妥当性、基準関連妥当性、信頼性の検証のため、乳がん化学療法期間中に就労を継続していた者を対象に、無記名自記式質問紙調査を行った。回答者数は201名（回収率88.5%）、有効回答者数は172名であった（有効回答率85.6%）。項目分析、探索的因子分析により、質問項目は、「自分なりの働き方を見出す力」、「体調に応じて日常生活を整える力」、「能動的に仕事を調整する力」、「化学療法による副作用症状が及ぼす影響を予測する力」の4因子27項目に集約された。また、Self-Care Agency Questionnaire: SCAQ-29項目版の合計点と、探索的因子分析で集約された4因子27項目の合計点及び各因子の下位尺度得点において有意な相関が認められ、基準関連妥当性が確認された。Cronbachの α 係数は、4因子27項目で0.865、各因子は0.852～0.743であり、信頼性が確認された。臨床活用に向けた視点から質問紙原案を修正し、「乳がん化学療法を受ける患者の就労継続にかかわるセルフケア能力を把握する質問紙」を開発した。また、看護師が質問紙を活用することにより、就労継続への支援を検討できるよう、「乳がん化学療法を受ける患者の就労継続にかかわるセルフケア能力を把握する質問紙の活用ガイド」を作成した。

これまでは、乳がん化学療法、女性労働者という特性を踏まえたセルフケア能力に関する分析は十分には行われていなかったが、本研究では、質問紙を開発でき、さらにその質問紙を看護師が活用するためのガイドを作成したことに独創性・新規性がある。この学位論文について対面審査（令和4年1月11日）を行い、以下の指摘がなされた。①「セルフケア能力」に関する用語の定義の再検討、②研究課題2の基準関連妥当性の検証で使用した尺度(SCAQ-29)を使用した理由の記述不足、③研究課題2の属性と就労継続にかかわるセルフケア能力との関連において、有意差がなかった項目に関する結果・考察の記述不足、④研究課題1の研究対象者の面接調査から抽出された概念と研究課題2の探索的因子分析で抽出した因子との関連からの因子名の再検討、⑤作成した質問紙の活用場所に関する再検討、⑥総合考察における国際的視点に関する論述の加筆、⑦総合考察（生涯健康支援看護学における本研究の意義）において、本研究の結果をもとにした論理的記述、⑧表の明確な記載、などであった。その後、上記の指摘事項についての修正が確認された。

令和4年1月27日に博士論文発表会（最終試験）が行われ、発表に対して以下の試問がなされた。①研究課題1の研究対象者の職種による体験・対処の違い、②開発した質問紙の汎用性と発展性、③質問紙の得点とその解釈方法などであった。研究内容のプレゼンテーションと試問への回答は、わかりやすく適切な説明であった。以上より、審査委員会は、最終試験を全員一致で合格とした。

本学位論文は、乳がん化学療法を受ける患者の就労継続を支援する看護師が活用できる、セルフケア能力にかかわるセルフケア能力を把握するための質問紙を開発し、併せてその質

問紙を適切に活用するために活用ガイドを作成したものであり、看護師がより個別のかつ継続的な就労支援を提供するためのツールとして独創性・新規性を有している。また、本研究により開発された質問紙は、乳がんだけではなく、女性生殖器がん化学療法を受ける患者等への就労継続支援にも活用可能となる発展性が期待できる。さらに、国際的にも意義のある研究である。以上より、審査委員会は、博士（看護学）の学位を授与するにふさわしいものであることを認めた。